

# 皆野町の教育の未来について語る



皆野町教育委員会 教育長  
新井 孝彦

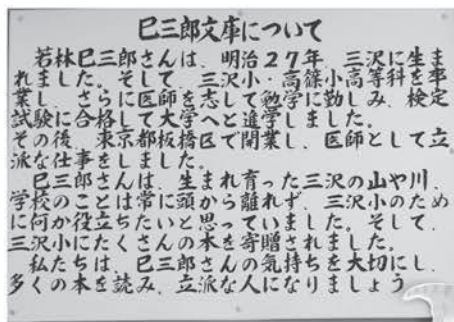
早稲田大学人間科学学術院 教授  
扇原 淳

皆野町と早稲田大学人間科学学術院は、令和元年に包括連携協定を締結し、さまざまな分野で連携して事業に取り組んでいます。このたび町の教育の未来について、新井教育長と扇原教授が熱く語り合いました。その対談の様子を紹介します。

## ふるさとを愛する心

### 【新井教育長】

三沢小学校の図書室に、「若林巴三郎文庫」があります。明治27年に三沢で生まれ、都内で病院を開業したのですが、三沢を離れたあとも、ふるさとの役に立ちたいという思いから、たくさんの本を母校に寄贈されたそうです。心はいつもふるさとにあるという思いって、みんなあるんじゃないかと思えます。扇原教授は皆野町のご出身ですが、ふるさとはどのような思いがありますか。



三沢小に残されている  
若林巴三郎文庫

### 【扇原教授】

私がふるさとを意識するようになったのは、研究室の学生たちと「ふるさと支援隊」という活動を始めたことがきっかけです。「ふるさと支援隊」とは、高齢化や過疎化が進行する中山

間地域で大学生が活性化に取り組み、埼玉県の制度です。地域のかたがたのご紹介やご支援をいただき、農作業や祭りに参加するようになりました。この活動を始めるまでは、自分のふるさとに思いを巡らすことは正直それほどありませんでした。しかし、農作業が終わった夕方に、美の山に夕日が落ちていく様子が子どもの頃に見た風景と重なり、今を形作る自分と過去の記憶がつながった感覚がありました。

### 【新井教育長】

扇原先生は学生たちとの活動をとおして、ふるさとを意識するようになったのですね。ふるさとのことを学ぶ意義についてどのようにお考えですか。

### 【扇原教授】

学生たちには、ふるさとや地域のことに徹底的に取り組みむように言っています。

研究室では、海外との交流も積極的に行なっているのですが、自分が育った、あるいは暮らす地域の特徴が伝わらないと、海外の人はあまり興味を持ちません。例えば、日本の紹介をする際に、多くの学生が富士山や浅草など世界的にも有名な場所や地域を取り上げます。しかし、海外の人からは「あなたが生まれたまちはどんなまち」とよく

聞かれます。この質問に上手く答えられない学生が多い印象です。

そこで、学生には、活動場所である皆野町の魅力を紹介できるように指導しています。自分のふるさとの知識や経験は世界の人々とやり取りをする重要なツールだといえます。

## ふるさと教育「みならの学」

### 【新井教育長】

ふるさとについて学ぶ経験は、将来にも生きてくるのですね。町を愛し大切にすることを養うためのふるさと教育として、「みならの学」を構想中です。幼稚園教育をベースに、小・中学校のカリキュラムを作り、教育活動の中で町のことを体系的に学んでいきます。「みならの学」で学んだ子どもたちが、海外の人に対しても町のよさを自分の言葉で発信できるといいと思っています。

### 【扇原教授】

自分の言葉で発信するためには、町の農業や産業・暮らしなどの学んだことを、当事者意識を持って考える必要があります。「みならの学」では、子どもたちが町の魅力をさまざまな方向から考え、発信できるように期待しています。